

## 平成23年度全国学力・学習状況調査の調査問題分析(その2)

前号では、平成23年度「全国学力・学習状況調査」(以下、「国の学力調査」という。)の調査問題のうち、算数・数学の問題を分析した結果について紹介しました。本号では、国語の調査問題について紹介します。

なお、平成23年度 国の学力調査の問題、正答例及び解説資料については、国立教育政策研究所のホームページに掲載されていますので、次のURLより御覧ください。

URL : <http://www.nier.go.jp/11chousa/11chousa.htm>

### 小学校国語Aの調査問題より

#### ● 調査問題(領域:「C 読むこと」)

6 次は、小池さんが住む糸野市で行われた、「図書祭り」について書かれた新聞の記事です。これを読んで、あとの問いに答えましょう。

一 小池さんは、この記事の中の[A]・[B]・[C]の三つの関係について考えました。三つの関係の説明としてふさわしいものを、次の1から4までの中から一つ選んで、その番号を書きましょう。

- 1 記事の中で最も伝えなかった内容を[A]で示し、それに賛成する考えを[B]、反対する考えを[C]に書いている。
- 2 記事として取り上げた内容の中で最も古い事実を[A]で示し、次に起こった事実を[B]、その次を[C]と順番に書いている。
- 3 記事の中で問題となっている事実を[A]で示し、それを解決するための具体的な方法を[B]と[C]に書いている。
- 4 記事の内容を短い言葉で見出しにして[A]で示し、その内容を[B]から[C]へとだんだんくわしく書いている。《正答》

30 経済 14版 2011年(平成23年)3月22日(水曜日)



感情豊かに絵本を朗読する参加者

**読書の楽しさ広がる 糸野市 図書祭り**

本の街、糸野市で18日から3日間、「図書祭り」が開催された。会場となった糸野市立図書館周辺では、祭りの名物となっている朗読大会や登場人物当てクイズなどのさまざまなイベントが開かれ、盛り上がった。

今年で3回目を迎える「図書祭り」には、市内外から昨年を約300人上回る約1200人もの参加者があり、朝年以上のにぎわいを見せた。

会場周辺の道路は歩行者専用になり、本や作家の色紙を売る店が並んだ。地域交流館では、午前と午後に分け、登場人物当てクイズなどが催された。

特に人気だったのが朗読大会。プロの声優陣向けの朗読をした開市の小畑陽二さん(12)は、「みんなから大きな拍手をもらってとてもうれしかった。これからはいろいろな本の朗読に挑戦したい」と笑顔。

「今年、市立図書館の利用者が少なくなっているが、この祭りを通して、読書をする楽しさをいろいろな形で感じてもらえたと思う。このことが利用者数の増加につながればうれしい」と声をはずませていた。

#### ● 出題のねらい

「必要な情報を得るために、新聞記事を効果的に読むことができるか」をみる問題です。本問は、新聞記事を読み、その記事の見出し・リード・本文の関係についての説明として適切なものを選択できるかをみる問題になっています。

#### ◆ 誤答分析のポイント

選択肢1、2、3は、[A]見出し・[B]リード・[C]本文の構成を捉えることができなかつたと考えられます。

☆ 指導の手だて

→ 目的に応じて、効果的な読み方を工夫する指導の充実を図ることが大切です。

新聞記事の内容を的確に捉え、必要な情報を得るためには、見出し・リード・本文の3つの関係を理解させることが大切です。実際の新聞を活用し、見出し・リード・本文の構成を確認しながら、記事の概要を捉え、必要な部分を読むことができるという新聞記事のよさに気付かせる指導を行います。その上で、読者の目的に応じて記事の概要を読み取ったり、詳細な情報を取り出したりするなど、効果的な読み方を工夫させます。

平成23年度「児童・生徒の学力向上を図るための調査」(以下、「都の学力調査」という。)でも、「B 書くこと」の領域で、次のような新聞記事を使った文章の組み立てを捉えることができるかをみる問題を出題しました。



- 8 (2) 「クラブ活動」「ツルレイシ」「水泳記録会」のそれぞれの新聞記事に共通している文章の組み立てはどのようになっていますか。次のアからエまでのの中から最もふさわしいものを一つ選び、記号で答えましょう。
- ア 「四年生の活動のしょうかい」「三年生へのよびかけ」「自分が体験したこと」という組み立てになっている。
  - イ 「四年生の活動のしょうかい」「自分が体験したこと」「三年生へのよびかけ」という組み立てになっている。
  - ウ 「自分が体験したこと」「四年生の活動のしょうかい」「三年生へのよびかけ」という組み立てになっている。
  - エ 「自分が体験したこと」「三年生へのよびかけ」「四年生の活動のしょうかい」という組み立てになっている。

第3学年及び第4学年の「B 書くこと」の領域では、言語活動例として新聞が取り上げられています。その特徴として、「複数の種類の文章を集めて編集し、見出しを付けたたり、記事を書いたり、割り付けをししたりすること」とあります。新聞の特徴を知り、書く体験をすることが、国の学力調査で取り上げられた第5学年及び第6学年の「C 読むこと」の「イ 目的に応じて、本や文章を比べて読むなど効果的な読み方を工夫すること」にも領域を超えてつながります。各領域、各発達段階に応じた指導事項や言語活動をよく理解し、関連付けながら指導していくことで、指導の効果を高めることが重要です。

中学校国語Bの調査問題より

● 調査問題 (領域: 「C 読むこと」)

- 2 (問題文略)
- 一 この文章の段落相互の関係について説明したものとして最も適切なものを、次の1から4までのの中から一つ選びなさい。
  - 1 3段落は、2段落で説明された内容に対して否定的な意見を述べている。
  - 2 4段落は、3段落までの様々な事例を踏まえて新たな疑問を述べている。
  - 3 5段落は、4段落の内容を受けて明らかになる事柄とその例を述べている。《正答》
  - 4 6段落は、1段落で提示された課題について様々な解決方法を述べている。

※下線は筆者が付した。

● 出題のねらい

「説明的な文章を読んで、段落相互の関係を理解し、文章の展開を捉えることができるか」をみる問題です。本問は、特定された二つの段落相互の関係だけを捉えるのではなく、4つの選択肢においてそれぞれ異なった段落同士の関係について述べられているので、文章全体の展開を的確に捉えることができるかを判断する問題になっています。

◆ 誤答分析のポイント

各段落に書かれていることの要点を理解し、段落相互の関係を的確に捉え、選択肢の記述と対応させることができなかつたと考えられます。

☆ 指導の手だて

→ 観点を明確にし、文と文、段落と段落のつながりを理解させる指導の充実を図ることが大切です。

まず、文章を語や一文などの小さな単位から捉えさせることが必要です。文章は、文と文とが何らかの関係性をもって連続して構成されています。したがって、第一に観点を明確にして「何らかの関係性」を見付け出させる必要があります。具体的には、指示語や接続語です。

指示語とは、ものごとを指し示す語で、「こそあど言葉」とも言われます。一語だけではなく、語群・文・段落を表すこともあります。指導に当たっては、特に、代名詞としてもものを指す「これ」「それ」「あれ」「どれ」に注意します。その際に、主語・述語を中心として文を単純化することによって、生徒は「こそあど」が示すものが理解しやすくなります。

接続語は、文と文との論理関係を明確に示しているのので、接続語の前後の文節や文等とともに、正確に捉えられるようにする必要があります。特に、「しかし」「だが」などの逆接を表す接続語、「また」「かつ」などの付け加える働きをする接続語、「すなわち」「つまり」などの説明、要約の働きをする接続語は、話の展開が変化する可能性を示すものなので、前後の文節や文等を含め、十分注意をして読ませることが大切です。このように、形式的なつながりを理解させていきます。

具体例として、問題文の第1段落のつながり方を図示します。

マンモスや恐竜などの骨を博物館で観察したことはあるだろうか。

↓

これらの動物は既に絶滅しているにもかかわらず、まるで今にもよみがえりそうな姿で生き生きと復元されている(こと)。

↓

これは、絶滅した生物を分類し、その生態や進化の過程を明らかにする古生物学という学問の研究成果の一つである。

↑

マンモスや恐竜のような大型動物の場合、数万年から数億年という時間を経ても、骨の化石が比較的よい状態で発見される。

↑

しかし(逆接の接続詞)、小型動物の場合、堆積物に埋没する過程で分解されて、骨はほとんど残らない。

正答となる選択肢3に関わる第5段落の一部分をみてみましょう。

5 この知識を応用し、(中略)現存するネズミ類で説明すると、例えば、(後略)

「この知識」と冒頭にあるので、「この知識」については、第4段落に記述があることは明らかです。「この知識」についての理解が曖昧であれば、再度読み直す必要があります。次に、「例えば」とあるので、その後には前段落に述べられた知識を応用した具体例が、これから記述されていることが推測できます。

また、本文を理解するだけでなく、選択肢そのものを正確に理解し、本文と対応させることができるようにすることが大切です。選択肢は抽象的に書かれていることがあるので、選択肢の文の意味を理解することが難しいことがあります。そこで、選択肢に付した下線部(選択肢のキーワード)に注目します。キーワードに沿って文を単純化すると、「第3段落は、否定的な意見を

述べている。第4段落は、新たな疑問を述べている。第5段落は、明らかになる事柄とその例を述べている。第6段落は、様々な解決方法を述べている。」となり、正答を導くことができます。

都の学力調査においても、平成21年度、22年度ともに段落相互の関係を問う問題を出題しています。平成21年度、22年度ともに、特定した2つの段落の関係を問うていますが、平成21年度においては61.2%の正答率で、平成22年度においては43.0%の正答率と、課題のある学習内容となっています。これまで述べた指導方法を活用していただければと思います。

## 【寄稿】「学力向上を求めて」都内公立小学校の校長先生より

都内公立小学校の校長先生より、児童の学力向上に関する寄稿をいただきました。

### ● 1年目（平成21年4月着任）

本校に赴任した年の7月に、前年度（平成21年1月）に実施した都の学力調査の結果が、私の手元に届きました。本校の結果をみると、第4学年「算数」は都の平均正答率を上回ったものの、第4学年「国語」及び第5学年「問題解決能力等」は都及び区の平均正答率を下回りました。続いて、平成21年4月に実施した国の学力調査の結果も届き、その結果は、第6学年「国語A・B」及び「算数A・B」の全てで国及び都の平均正答率を下回るものでした。

私は校長として、「都の学力調査及び国の学力調査の結果を受け、何か策を講じる必要がある。」と考えました。そこで、教員に対して『児童の確かな学力の向上のために、このような取組を行います。』という目標を設定し、設定した目標を達成するために、先生方一人一人が責任をもって学習指導を行いましょ。』と提案しました。この提案に対して、教員から「都の学力調査及び国の学力調査の結果は、ある特定の学年の結果であり、学校全体の結果を反映しているものではない。」や「この学年は児童数が少ないので、十分に習熟していない児童が一人いると、学年全体の結果に大きく影響し、平均正答率が下がってしまう。」のような意見があり、実現には至りませんでした。

私は、「これらの意見は誤っていないが、教員として大事なことは、児童の学力の実態を的確に捉え、児童の学力向上のために何をすべきなのかを考え、努力することではないか。」と考え、年度途中に授業改善プランの見直しを行いました。本校の児童の学力に関する状況を踏まえ、これまでは行ってこなかった朝学習を週2回行い、児童の学力向上を図りました。この取組は、この年の11月から実施しました。

### ● 2年目以降

2年目に入り、児童の学力向上に関する取組を充実させるため、校内研究を通して教員の授業力を向上させたり、教員を校外の研究発表会へ積極的に参加させたりしたことで、教員の意識も徐々に変容していきました。

平成22年7月に、平成22年1月実施の都の学力調査及び4月実施の国の学力調査の結果が届きました。国の調査は、第6学年「国語A・B」及び「算数A・B」の全てで国及び都の平均正答率を下回りましたが、都の調査では、第4学年「国語」及び「算数」とともに都の平均正答率を上回りました。

平成22年10月実施の都の調査では、第4学年「国語」及び第5学年「読み解く力に関する調査」が都の平均正答率を上回り、第4学年「算数」は都だけでなく区の平均正答率も上回りました。

また、平成23年7月実施の都の調査では、第5学年「国語」「社会」「算数」において都の平均正答率の速報値を上回ることができました。このように教員の意識が変容していったことに伴い、児童の学力も徐々に向上していきました。

「この学年は児童数が少ないので、十分に習熟していない児童が一人いると、学年全体の結果に大きく影響し、平均正答率が下がってしまう。」と考えたとしても、「だから、仕方がないことだ。」とあきらめてしまっは、児童の学力向上は望めません。児童の学力に関する実態を、普段の授業の様子や様々な学力調査の結果などから多面的に捉え、教員一人一人が授業力を向上させるために努力すること、児童の習熟の程度に応じて指導を充実することが大切です。

私は校長として、これからも児童の学力向上のために力を尽くしていきます。

**【連載】義務教育特別支援教育指導課指導主事より 第6回:小学校 算数科**

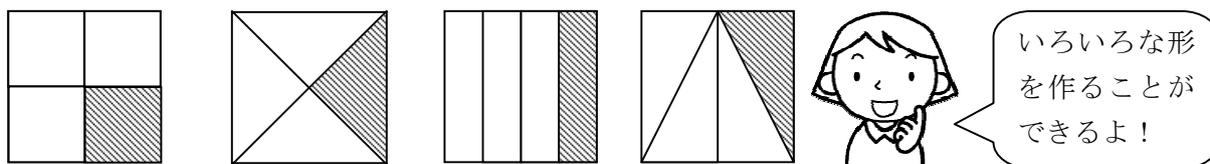
- 今年度から全面実施されている小学校学習指導要領では、第2学年から「分数」の学習を行います。これまで、分数の学習は、第4学年で、「端数部分の大きさや等分してできる部分の大きさなどを表すのに分数を用いること。」という意味の指導から学習を行いました。よって、教科書では、「ある量を測ったときの、はしたの大きさの表し方を考えよう。」という学習課題が多くありました。しかし、分数の意味には「量を表す数」の他にも、「①具体物を等分した大きさを表す。」「②単位分数のいくつ分かを表す。」「③割合を表す。」「④除法の商を表す。」などがあります。このように、分数には様々な意味があり、児童にとって意味理解が難しい学習の一つでした。
- 今回の学習指導要領では、基礎的・基本的な内容の定着を図るために、学年間でのスパイラルによる教育課程を重視しています。そこで分数の学習について、第2学年で「簡単な分数」、第3学年で「簡単な分数の加法及び減法」のように、取扱いの程度を少しずつ高める工夫がなされています。
- このようなことから、例えば第2学年では、分数の意味を理解する上で基盤となる学習として、折り紙などの具体物を用いて $1/2$ 、 $1/4$ などの大きさを作る活動を行い、分数の意味を実感的に理解できるようにすることが大切です。以下は具体的な実践の概要です。

**「分数」小学校第2学年**

前時：折り紙を半分に折って、2つに切り、それらの大きさが同じであることを確かめ、【同じ大きさで2つに分けた1つ分を、もとの大きさの二分の一といい、 $1/2$ と書く】ことを学習します。

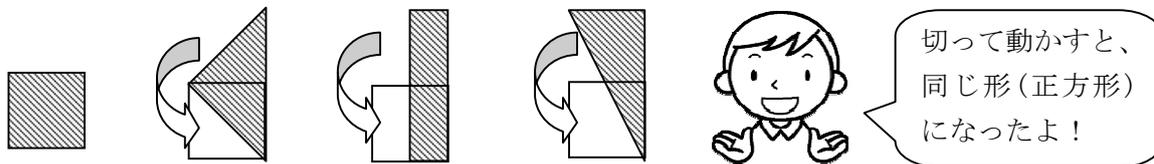
本時

「折り紙を半分に折り、さらに半分に折ったときにできる形について調べよう。」



- 児童は、折り紙をいろいろな形に折り、その大きさについて調べました。調べたことを基に、自分の考えを説明する場を設定すると、「できた形は違うけれど、どれも半分の半分なので、同じ大きさだと思う。」「半分は $1/2$ 、その半分は $1/2$ の $1/2$ になる。」「切って、重ねると、もとの大きさを4つに分けた1つ分になるので、 $1/4$ になるのかな。」のように、既習事項や生活体験などと結び付けて、自分の考えを説明することができました。

4種類の $1/4$ の形についても、切って動かすと、どれも同じ形（正方形）にすることができ、同じ大きさであることの理解が深まりました。



- 最後に、【同じ大きさに4つに分けた1つ分を、もとの大きさの四分の一といい、 $1/4$ と書く】ことを確認しました。
- 授業後の児童の感想からは、「同じ $1/4$ の大きさでも、いろいろな形があることが分かった。」「半分の半分は $1/4$ になることが分かった。」「 $1/3$ や $1/5$ の分数も作れるかな。」「半分の半分の半分も調べてみたいな。」と、分数について実感的に理解するだけでなく、「算数への関心・意欲・態度」が高まる姿をみることができました。

★ 本メール・マガジンの配信を希望する方は、件名に「メール・マガジン配信希望」、本文に所属・氏名を入力いただき、S9000024@section.metro.tokyo.jp へメールを送信してください。なお、本メール・マガジンは、pdfファイルにて提供いたしますので、携帯電話では読むことができない場合があります。